

イヴォ・アンドリッチの故郷ボスニアを訪ねて

元 吉 瑞 枝 (ドイツ語圏文学)

かつて「七つの国境、六つの共和国、五つの民族、四つの言語、三つの宗教、二つの文字、一つの国家」と形容された多民族・多文化の複合国家「ユーゴスラビア」が1990年代に数十万人の死者、数百万人の難民を出した内戦やNATOによる空爆を経て崩壊したことは、まだ記憶に新しい。現在、旧ユーゴスラビアは、スロベニア、クロアチア、マケドニア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、セルビア、モンテネグロの六つの共和国に分かれている。私は2001年かねて愛読していたオーストリアの作家ペーター・ハントケの『空爆下のユーゴスラビアで』⁽¹⁾を翻訳したが、それによって、それまで私にとって全く未知の場所だった旧ユーゴ地域が、突然、身近なところになり、みずからも数回その地に足を運ぶことになった。本稿は、2006年9月の私の旧ユーゴへの四度目の旅であるボスニア・ヘルツェゴビナへの旅のノート(抄)である。

この旅は、現在私が本学紀要に翻訳を掲載中の『戦争の国への旅—ユーゴスラビアでの一外国人の体験』⁽²⁾の原著者クルト・ケプルナー氏からの招待を受けてのものである。ケプルナー氏はオーストリア人で、元来、著述家ではなくビジネスマンであった。彼は、建築資材の会社を経営していた1990年代に、仕事上たびたびユーゴのさまざまな場所を訪れていたが、ユーゴ内戦についてメディアで報道されることが、自分が実際に体験したこととあまりにかけ離れていることに戸惑い、さらには憤りも感じて、ついにみずから筆を執ってこの大部の本を書きあげるに至った。その本は、セルビア語をはじめとしていくつかの外国語にも翻訳されて高い評価を受け、各地で朗読会も催された。そのためケプルナー氏は、いったん仕事を、同業者である妻に任せて、南ドイツのレーゲンスブルクの自宅で著述業に専念するようになったが、2005年の暮になって、ボスニアのトラヴニクにある古い工場を買い取って妻と共にその経営に携わるようになった。

トラヴニクは、ユーゴを代表するノーベル賞作家イヴォ・アンドリッチの生地であり、彼の作品『トラヴニク年代記』(邦訳『ボスニア物語』)⁽³⁾の舞台である。ま

たボスニア・ヘルツェゴビナは、1990年代の内戦で最も多くの死傷者を出した地域であり、一国の中に、ムスリム人⁽⁴⁾およびクロアチア人から成る「ボスニア連邦」とセルビア人が多数住む「ボスニア・セルビア人共和国」とが並存している国である。トラヴニクは前者に、そしてアンドリッチの代表作『ドリナの橋』⁽⁵⁾の舞台であるヴィシェグラードは後者に属する。

私の第1回目と第2回目の旧ユーゴの訪問地は、主としてセルビアのベオグラードおよびその周辺に限られ、第3回目は、主としてクロアチアだった⁽⁶⁾。このとき、クライナ地方⁽⁷⁾を通してボスニアにも入りビハチまで行ったが、時間も限られていて、ほとんど垣間見た程度に終わった。しかしそのとき垣間見たボスニアの風景と人々はずっと心に残っていた。それで私は、ケプルナー氏からの招待を受けると、2006年9月、ボスニアへ向けて旅立ったのである。

9月7日、ウイーン経由でサラエボに着いたのは、もう夜の9時半を過ぎた頃だった。空港まで迎えにきてくれていたケプルナー氏の車で、約90キロ離れたトラヴニクへ向かった。暗くて照明もほとんどないので周りの風景はよく見えないが、どんどん山あいの地へ入っていく感じがする。「バルカン」は元来トルコ語で「山岳」を意味する言葉であるが、ボスニアには特にそれがあてはまる。やがて道路は、「ボスニア」の語源にもなったボスナ川に沿って走り、ようやくトラヴニクに着いたが、ケプルナー氏の家は、そこからさらに外れ、舗装もないデコボコ道を行った先にある、人の気配のほとんどない山かげのようなところにあった。もう夜中になっていたが、彼の妻と娘が料理を作って待っていてくれた。庭で採れた野菜や手作りの蜂蜜などが中心で、それらについて語る夫妻を見て、彼らにとって新しい生活が始まったことを感じた。まわりは、私たちの話す声以外、何の物音もしない深い静寂に包まれている。工場は、どこにあるのだろうか。

翌朝、昨日は見えなかったが、彼らの住まいの近くに工場があった。工作機械の工場だが、まだ完全には修復されておらず、数人が簡単な機械を使って懸命に働いているだけだった。彼らはすべてムスリムの人たちとのことだった。私たちを見ると、手を休めず、しかし親しげな笑顔で挨拶を返してくれた。敷地は広いが、まだほとんど廃墟のようなところもあり、工場の敷地のすぐ横には、地雷が敷設されていた場所がある。その地雷は、内戦が終わって10年も経った2004年によく撤去されたが、その作業で3人が即死した、と、その場に置かれた墓石に書かれていた。地雷は、撤去されないまま放置されたらもちろん危険だが、撤去にも危険が伴う。

地雷の危険がある場所は、いまも方々にあって柵が張られている。かつて反地雷キャンペーンのために故ダイアナ妃が、この小さな質素な山間の街トラヴニクにもやってきたとのことである。まだ当地の地雷がほとんど撤去されていなかった1995年、彼女の死の前々年のことである。

小さな目立たない街トラヴニクだが、15世紀～19世紀のオスマン・トルコ支配下の時代には、地方政府所在地（首府）は、サラエボではなくトラヴニクにあり、イスタンブールから^{ヴィジュアル}太守が代々この地に派遣されてきていた。現在の街並みや家屋、飲食等を見ても、この約5世紀におよぶトルコ時代に、トルコふうの文化や生活様式が、この地に深く浸透していったことがうかがえる。山に登り、要塞から下を見下ろしたとき、左右の山に挟まれた狭い谷あいには、遠方から街に至る一本の道が通っているのが見える。「あの道を通してトルコ人がやってきたのですよ」と、一緒に見ていた人が教えてくれた。それは、ヨーロッパの周縁であるバルカンにイスラム教徒が生まれ、イスラム教徒とカトリック教徒と正教徒の三者の緊張関係の種が撒かれた始まりでもあった。が、三者は長く共に暮らしてもきたのだ。アンドリッチの『トラヴニク年代記』は、ナポレオンがこの地にフランスの領事館を開設してからそれを閉鎖するまでの8年間の出来事を、当地に生きるさまざまな人たちの人生を通して描いたものである。そこには、イスラム教徒も正教徒もカトリック教徒もユダヤ人もいる。彼らはこの時期、一様に、しかしまた各様に、この山岳の街で世界史の渦に巻き込まれ、葛藤しながら、共に生きていたのである。

しかし、20世紀最後に起こった内戦では、そのようなありかたそのものが否定された。夥しい死者を物語る墓地が街の真ん中にあり、そこには小さな墓があふれている。そして追放された人たちの家も無人のまま見捨てられ、廃墟と化している。このような光景は、ボスニアの、また旧ユーゴの至るところにみられる。こうしてトラヴニクは、他の多くのボスニア（「ボスニア連邦」）の街と同じように、モスクとミナレットの多いイスラムの街となり、深夜、ほとんど物音のしない夜闇のなかに、美しい男声の唱和し合うイスラムの祈りの声が響きわたる。それは、モスクでの祈りに限らず、各戸で祈る声が互いに唱和し、響和しあうのだという。その祈りのなかに各人のどんな思いが込められているのか、私はその問いを胸に、初めて聞く言葉と調べに耳を傾けた。

次の日、トラヴニクから南下し、ノビ・トラヴニク近郊のラストボというところから車道を離れ、深山のあいだを分け入るように進んでいくと、木炭をつくる炭焼

きの煙だけが立ち昇っているような静かな奥地に、不思議な墓石群がひっそりと立っていた。それは、先の内戦のものではなく、はるか古の^{いにしえ}もので、一説には、当地に住んでいたギリシャ人のものではないかとされ、結婚式で客たちが互いに争って殺し合うというギリシャの伝説にちなんで「結婚式の墓」と呼ばれているとのことである⁽⁸⁾が、また一説には、それらは、当地でボグミレン [ボゴミル] と呼ばれている、南フランスのカタリ派⁽⁹⁾にも似た異端者の墓ではないかといわれている。それらの墓はすべて、縦長の墓石の両側に丸い短い突起がついており、小さな腕をもった人間の体をも連想させる奇妙な形をし、多くは、その墓石の正面に十字架が彫られている（写真参照）。また墓石は、太陽礼拝を連想させるように、東または西を向いているものが多い。ボスニアにはこのような墓石群がほかにもいくつか存在するが、当地のムスリムの人たちの語るところによれば、キリスト教会から弾圧されていたボグミレンが、ボスニアで最初にイスラム教を受け入れた人々だったのではないかという。トルコ支配下においてイスラム教への改宗は強制されたものではなかった、にもかかわらずセルビア人のなかにイスラム教を受け入れた人とそうではない人が存在した。彼らを分けたものは何だったのか、については、おそらく違った解釈もあるだろう。ただ、人里から遠く離れて立っていたあの不思議な墓石群、その深い沈黙が謎のまま私の心に残った。



謎の墓石群（ノビ・トラヴニク）

三日目は、トラヴニクから東へ、『ドリナの橋』の舞台であるヴィシエグラードへ向かった。遠い道のりである。サラエボからフォーチャに向かってしばらく行くと「ボスニア・セルビア人共和国」に入るが、特に境界はなく、看板がいつのまにかキリル文字に変わっていることで、それとわかるだけである。フォーチャからは、ドリナ川に沿った谷間をひたすら北上する。ヴィシエグラードの近くまでくると、街よりも前に、まず「ドリナの橋」がその荘厳な姿を現す。そしてようやくその彼方に、川に沿った美しい静かな街のたたずまいが見えてくる。アンドリッチが幼年時代と少年時代を過ごした国境の街ヴィシエグラードである。

ドリナ川にかかるこの橋の建設は、少年時代にトルコ軍に拉致されてトルコの大

宰相となった当地出身の元セルビア少年の思い出に端を発し、多くの人々の人生を巻き込み、さまざまな悲劇や物語を生みながら、五年の歳月をかけて完成された。それが、川をはさんだ両地域、ボスニアとセルビアを結んだばかりではなく、東西の文化が交流する架け橋ともなり、イスラム教徒も正教徒もユダヤ人も、土地の者も旅人もこの橋を行き来し、ここで生き、出会った様子がアンドリッチの『ドリナの橋』に描かれている。しかしその橋も、第一次世界大戦で爆破されてしまう。そのとき、崩れつつある無残な橋の姿を目にしながらか、先祖伝来の橋の管理人アリホジャは、すべてを造ったと思うとすぐにおち壊してやまない人間について思いをめぐらし、「橋が彼らの満たされることのない飢えと理解を超えた欲望の餌食となってしまうこと、これはみんなあり得ることだ。だがそうでないことが一つだけある。神の召命に応じて永遠の建造物を建て地上をより美しく、地上の人間の生活をより楽しくする偉大で聡明な人間がすっかり姿を消してしまうこと。これはあり得ない」⁽¹⁰⁾ と、みずからに言い聞かせつつ息をひきとるのである。

アンドリッチは、第二次大戦中ナチスによる爆撃が行われていたベオグラードでこの作品を書いた。アリホジャの言葉は、アンドリッチがみずからに言い聞かせた言葉でもあり、後世へのメッセージでもある。多くの川が流れている旧ユーゴスラビア。それらの川にかかる多くの橋が、先の内戦でも破壊された。ヴィシエグラードを立ち去るとき、振り返ると、街も橋も川も、そして川に浮かんでいる舟や魚を釣っている人たちも、すべて夕日に染まって輝いていた。この美しい橋が、そして旧ユーゴの、否、世界のどの橋も、人間の「欲望の餌食」となってしまうことは「あり得ること」だとしても、「そうでないことが一つだけある」と願ったアリホジャの祈りを反復しながら、私はその地をあとにした。⁽¹¹⁾

[注]

- 1) ペーター・ハントケ、元吉瑞枝訳『空爆下のユーゴスラビアで』同学社、2001年。
- 2) 『熊本県立大学文学部紀要』第10巻第2号（2004年、67-89頁）、第11巻（2005年、61-78頁）、第12巻（2006年、125-142頁）、第13巻（2007年、57-83頁）参照。
- 3) イヴォ・アンドリッチ、岡崎慶典訳『ボスニア物語』恒文社、1972年（初版）。
- 4) トルコ支配下の時代にイスラム教を受け入れた人々の流れを汲む人たちの総称で、1971年以降、民族名として公認された。セルビア人、クロアチア人と共に、旧ユーゴスラビア地域における主要民族の一つ。
- 5) イヴォ・アンドリッチ、松谷健二訳『ドリナの橋』恒文社、1966年（初版）。
- 6) 第1回～第3回の旅については下記の拙文を参照していただきたい。

- 「ペーター・ハントケへの旅」(『ラテルネ』87号、17-20頁、同学社、2002年)。
「メディアに隠された場所で」(『La Vue』No.9、7-8頁、るな工房、2002年)。
「翻訳のあとで-旧ユーゴへの三度の旅」(『熊本日独協会会報』No.17、17-18頁、2003年)。
- 7) クロアチア西部のボスニアとの国境沿いに帯状に広がる地帯。かつてセルビア人の居住地域だったが、1995年のクロアチア軍の急襲によって追放された。
- 8) Cf. “A guide through history” Travnik Museum, 2006, p.25. 墓石群の写真も同書に拠る。
- 9) マニ教の流れを汲む中世の異端。南仏ではアルビジョア派ともいう。ボゴミルは、バルカン半島に入ったマニ教の一派。
- 10) アンドリッチ、松谷訳『ドリナの橋』恒文社、1997年(第4版)、348頁。
- 11) この旅では、モスタルやサラエボも訪ねたが、紙数の関係上、本稿では割愛する。



ドリナの橋(ヴィシェグラード) [筆者撮影]